

# 丸山幹治『余録二十五年』の事

野田裕久

## 目次

- 一 主題の限定
- 二 『余録二十五年』——その読解と批評
  - (一) 昭和六年から支那事変勃発まで
  - (二) 支那事変勃発から対米英宣戦まで
  - (三) 対米英宣戦から敗戦まで
  - (四) 敗戦から昭和二十八年まで

## 一 主題の限定

本稿は、当代一流の新聞記者と目される丸山幹治の一著作、『余録二十五年』を読解ないし批評する試みである。<sup>(1)</sup>  
丸山幹治は明治十三年（一八八〇年）五月二日、長野県生まれ。明治三十四年（一九〇一年）に東京専門学校を卒業の後、文字通り新聞記者一筋の生涯を送ることとなる。

まず、新聞『日本』に入社するが間もなく退社。<sup>(2)</sup>『青森新聞』を経て『日本』に再入社し、明治三十七年に折りしも日露戦争の勃発するや「第三軍」の従軍記者として旅順攻囲戦の取材に当たすが、軍規違反を犯し本国に送還

処分となる。<sup>(3)</sup> 明治三十九年、新聞『日本』を退社して『京城日報』に入社。次いで明治四十二年には『大阪朝日新聞』に入社。ニューヨーク特派員とロンドン特派員を歴任するが、大正七年（一九一八年）に起こった筆禍事件<sup>(4)</sup>「白虹事件」による同社の村山龍平社長の辞任に伴い連袂退社。次いで大正八年から翌九年まで『大正日日新聞』、大正十年から十三年まで『読売新聞』、大正十三年から翌十四年まで『中外商業新報』、大正十四年から昭和三年（一九二八年）まで『京城日報』に所属した後、昭和三年十一月に『大阪毎日新聞』に論説委員として入社。コラム（時事短評）欄「硯滴」を担当、昭和十一年からは同系列の『東京日日新聞』に転動し同紙のコラム「余録」をも担当する。なお「余録」は「硯滴」と表題は異なるが同一の内容である。以降、大阪毎日・東京日日——昭和十八年一月からは『毎日新聞』に「硯滴」「余録」を昭和二十八年（一九五三年）まで書き続ける。（なお現在の毎日新聞は「余録」のみ）。昭和三十年（一九五五年）八月十六日没。丸山の経歴を見て一目瞭然なのは、昭和三年十一月の『大阪毎日新聞』入社が一大転機となっている点であろう。何よりもそれ以前と以後とは、勤務形態が殆ど両極端であることが印象的である。昭和三年十一月以前は再入社を含め延べ九社を転々と遍歴していたが、以後は『大阪毎日』・『東京日日』——後には『毎日新聞』と一社のみに所属し、二十五年にわたり同紙のコラム「硯滴」ないし「余録」の執筆に専念することとなったからである。その著作物に着目すれば「硯滴」「余録」以前と以後とに大別できるとも言えようか。

ジャーナリスト丸山幹治の総合的研究であれば、以上の経歴全体にわたる丸山の言説を把握することが必須となるが、本稿が取扱うのは——資料上の制約つまりは調査力の不足から——「硯滴」「余録」以降の評論に留まる。否、その「硯滴」「余録」だけを論ずるとしても少なくとも『黒頭巾を脱ぐ』（言海書房、昭和十年）、「溜飲を下ぐ」（言海書房、昭和十年）、「ジャーナリスト随筆選集」（言海書房、昭和十一年）、「事変下の日本」（人文書院、昭和

十三年）、『硯滴・余録』（道統社、昭和十七年）、『余録二十五年』（毎日新聞社、昭和二十九年）の六点が不可欠とは容易に推測できるのだが、現実には筆者が参照しえたのは僅かに『黒頭巾を脱ぐ』、『硯滴・余録』、および本稿の標題にも掲げた『余録二十五年』のみである。丸山幹治論として甚だ不十分であることは承知している。ただ、丸山幹治については（その次男・眞男とは対照的に）知られるところの少ないのが実情。その一点に即すれば本稿に些少の意義なきにしも非ずと、寛恕下されば幸いである。

『余録二十五年』は戦前・戦中・戦後と二十五年に及ぶ「硯滴」「余録」の記事を選び抜いた著作である。ここで本書の読解に当って留意すべき点を幾つか述べておこう。

第一に、著作者の特定を巡る問題である。同書「まえがき」中の次の二個所の記述を参照されたい。

終戦後、昭和二十四年ごろからは、週三回の執筆にとどめ、代りの論説委員が登場するようになった。しかし、それまでは週に一度休む以外、必ず私が筆を執っていたのであるから、二十五年間というものは、よく続いたと自分でも感心しているほどだ。（傍点は野田）

なお、「余録二十五年」といえば、昭和三年から二十八年までだが、ここに収めたものは、昭和六年から選んでみたのであることをお断りしておく。本書は何しろ二十五年間の新聞から、余録を選んだので、筆者の違うものはいっている。余録係り記者は、いつも大抵二、三人あった。だから、筆者の違うものもいくらかあるわけである。（傍点は野田）

これらの記述は相矛盾すると言わぬまでも、相互に整合性を欠く、少なくとも曖昧であるように見受けられる。『解説』すれば、同書収録分の「余録」のうち、ともかく昭和二十四年頃から以後のものについては、その全部が丸山本人によるものとは限らないという趣旨であろうか。いずれにせよ、どの記事が丸山のものでないのかが判明せぬ以上、更なる詮索には益はない。ともあれ『余録二十五年』の大半ないし殆ど全部の記事が丸山幹治の筆になると思われるから、大勢に影響を及ぼすことはあるまいが。

第二に、戦前戦中期の著作に収録された「硯滴」「余録」記事が戦後『余録二十五年』に再録された際、しばしば改変が加えられている点である。文言の加筆や削除もあれば、標題の変更もある。それらの改変が、たとえばカナ・漢字表記法の改正に伴う字句の修正といった純・技術的なものに留まるのにもかかわらず、あるいは読者の理解を助けるための補足説明と見なせるのなともかく、議論全体の主旨に係わるとすれば、もしくはニュアンスの変化をもたらす場合には、当然に（批判的な）分析と検討に値しよう。

第三に、「硯滴」「余録」執筆の態様についてである。いかなる状況の下、いかなる環境内にそれらは執筆されていたのか。その特徴として次の二点が指摘できよう。まず、執筆時間の著しく逼迫していたこと、また、各方面——政府・軍部・各種団体・一般読者——への殊更に周到なる配慮が要請されたことである。

大体が、硯滴、余録など、読者層が広くて反響が大きい。太平洋戦争の勃発直前など、開戦をめぐつて賛否両論が真ツ二つに割れていたから、自分の主張を少しでも含ませると、早速苦情が山のように来たものだった。

しかも当時は政府の干渉がうるさかったから、読者の意向、政府の希望、そして私の主観をどう統一するかは実に難かしい問題だった。

普通は、社で夕刊を見てから書きはじめる。締切まで一、二時間の余裕があるだけだ。電話や騒々しい雑音の中で想をまとめて書きなぐる。書きだめておくなど、もちろんできようはずはない。そうしたなかで、当り障りをよけて通るのだから筆端渋り勝だった。が、多くの場合は逃げ道を作って置くので、さすがの軍人も直接に私に対してどうこうということはなかったが、社の上層幹部にはたびたび苦情をつけてきたようだ。<sup>(8)</sup>

丸山の論説に、時に推敲不足や話柄の散漫（話の飛ぶこと）、<sup>(9)</sup>意味の不明瞭、論旨の不明さが見受けられるとすれば、<sup>(10)</sup>それらはこうした執筆態様に因るところが大きいのもかもしれない。

尤も、こうした種々の問題点にもかかわらず、丸山幹治『余録二十五年』は、その文体の軽妙洒脱さと言い、折りに触れて示される洞察と言い、なかなか魅力に富む著作ではある。また、「硯滴」「余録」における丸山幹治の言論活動の特色は、各紙記者が異口同音に讃辞を呈するように、その息の長さにある。「朝日新聞」「天声人語」によると「一つの欄を四半世紀も担当し続ける」ということは、日本の言論界はもとより世界の新聞界にも希有のことに属する。恐らく世界記録だろう」（同書一九八頁）との由である。『読売新聞』『編集手帳』子の次の一節は更に興味深い。

二十五年といえば四分の一世紀だが、この四分の一世紀は普通の歴史に比べるとほとんど二世紀に相当するくらいの疾風怒涛（濤）、興亡盛衰の二十五年間で、このはげしい波と風のアラシは当然にペンの世界にも真ッ先に押し寄せてきた。

ペンを折る人、アラシに屈服する人といういろいろある中に、このアラシをくぐりぬけ、さらに戦後の追放の風

にもまけずに書きつづけたということは一種の驚異ではあるまいか。(同書一九九頁)。

まさに『余録二十五年』の意義はその点にあると言えよう。と同時に、戦前・戦中・戦後にわたる激動の二十五年を筆を折らずに通せたということは、『硯滴・余録』(昭和十七年刊)の「自序」で「今迄、その筋から叱られたことはなく、先づ大過なかつたと思つてゐるが」云々と、いみじくも著者自ら記すように、それこそ戦前戦中は治安維持法はもちろん不穩文書臨時取締法(昭和十一年)や新聞紙等掲載制限令(昭和十六年)にも触れず、戦後は公職追放にも或いはレッド・パージにも見舞われなかつたことを意味する。その点で丸山の「硯滴」「余録」は、さながら辛うじて、許容された言論<sup>(12)</sup>の典型と評することもできようか。許容された言論に時宜に適うべく論旨や表現に微調整なり自己規制なりが窺えるとしても怪しむに足りないのだ。それが行き過ぎると時流迎合、時勢便乗ともなりかねない。実際、(後述するように)大東亜戦争敗戦後の論説にはその気配を濃厚に漂わせるものが少なくない。にもかかわらず、「余はもの欲しげでないと信ずる八つ当り主義である。左翼に追隨せぬは勿論、右翼に割り込みもせず、所謂自由主義者にも是非同伴を願はない。何だ、出鱈目主義さ、と仰しやるのも御勝手である。八つ当りでない、八つ当らず、八つ触らずぢやないか、と皮肉られるのも覚悟の前である」<sup>(13)</sup>との自負の通り、全体として評価すると丸山の言説には、特に戦前戦中期の言説には、一定の独立不覇性や非党派性や首尾一貫性が看取されるのである。

以下、『余録二十五年』の読解と批評へと進んでいこう。

註

(1) たとえば『東京新聞』『筆洗』子は、「丸山さんの如きは当然文化勲章に値いする。新聞記者を志す人々は、丸山先生に続く覚悟が必要だ」と讀んでいる。『余録二十五年』（毎日新聞社、昭和二十九年）二〇一頁を参照。

(2) 「見習いとして校正をしていたが、二ヵ月後に社説の副題に誤植を残したまま通してしまった」ため、「爾今、出社に及ばず」の次第となったという。前掲書「まえがき」を参照。

(3) その理由については、丸山自身の記述に若干の齟齬がある。

すなわち、一方で『余録二十五年』の「まえがき」では、「戦争の悲惨な姿を写した」「私の長文の記事は三ページをつぶして一度に掲載された。（中略）さて発行されてみると読者よりも陸軍のほうが腰をぬかした。『毎日』太田原在文特派員、「報知」の沢本特派員も私と同じような方法で記事を送り、やはり問題をまき起した。長岡外史参謀次長が社の責任者を招き、軍機漏洩であると威丈高に怒鳴った。私たちは第三軍から追放され、大連で乗船するまで護衛兵つきで送還されたのであった」とあるように、戦争の惨状を報じた記事により第三軍を追放され送還処分された、と説める。

しかし他方で、同書の別の箇所を読むと、事情は異なっているのである。曰く、「……長岡参謀次長は余の通信があまりに戦争の悲惨を描き過ぎると日本新聞社員に注意したとのことである」（七三頁）、「余は旅順の陥落を見ることが出来なかった。余は大毎、報知の特派員と共に戦地を去らざるを得なかった。つまり規則違反で追放せられたのである。陥落後に掲載すべく、特別の手段を執って本社に送った通信が、第二回総攻撃後に掲載された手違いからであるが、余等の不謹慎は争えない。軍事知識のない若気の過失でもあった」（七四頁）と。この記述からは、「戦争の悲惨」を記事にしたことに対しては「注意」があっただけで、追放ひいて送還処分は別途の規則違反に基づくもの——未だ存在せぬ「事実」を報道・掲載した非に因るものであったことが判る。

これらのうち、その具体性から推して、後者の記述に信憑性があると思われる。少なくともより正確と推測できそうである。なお参考までに『丸山眞男集』別巻（岩波書店、平成九年）の年譜では、次のように書かれている。「日露戦争の従軍記者とし

て乃木希典率いる第三軍の旅順攻囲戦の悲惨な実状を報道したため前線から送還される」(二七頁)と。この通りなら、丸山幹治は立派な硬骨のジャーナリストだが、仮にも記事捏造による処分が事実なら、その限りでジャーナリストとしては——丸山幹治自身が告白するように——「不謹慎」ということになる。

- (4) 『丸山眞男集』別巻二九頁の記述を借用すると、「白虹事件」とは、大正七年八月二十五日、主として米騒動を巡って寺内内閣を糾弾する「寺内内閣弾劾近畿関西新聞記者大会の模様を報じた『大阪朝日新聞』の記事中「白虹日を買けり」の一文が不穏当であるとして発売禁止」となった事件である。「白虹日を買けり」——白い虹が太陽にかかることは内乱・革命の予兆とされる。

なお、この事件の巧みな描述として立花隆「大正デモクラシーの旗手・吉野作造」(『文藝春秋』二〇〇〇年九月号、三一八—三三三頁、特に三三四—三三六頁)を参照。

- (5) 『丸山眞男集』全一六巻、別巻一(岩波書店、平成九年)、『丸山眞男座談』全七冊(岩波書店、平成十年)、『丸山眞男講義録』全七冊(東京大学出版会、平成十二年)等々。

- (6) なお、初出時すなわち新聞掲載時には、標題そのものがない。

- (7) そうした改変が著者本人によるものとは限らない。新聞社や出版社の措置ということもありうる。いずれにせよ両者合意の上での改変であるが、ちょうど、中央公論社・嶋中事件を巡り丸山眞男が『毎日新聞』へ寄稿した際、「右翼テロをつけあがせるもの」と題されていたのが、新聞社の編集者の要請を受けて、結局は「右翼テロを増長させるもの」(昭和三十六年二月十八日付)と改められたように、『丸山眞男集』別巻、六一—六二頁を参照。

- (8) 『余録二十五』「まえがき」

- (9) たとえば「大養内閣の総選挙」と題するコラム(前掲書一九二二頁)など。

- (10) たとえば「三国条約」と題する記事の次の一文はどうか。

イタリア官邸は極めて率直に、この条約は「米国に対して欧洲戦争にもシナ事変にも介入を差控えるよう警告」したものと



いう見解を語ったが、無論、米国を「仮想敵国」とした条約ではない、イタリア官辺はただ米国を「仮想敵国」として語ったに過ぎない（前掲書九五頁、傍点は野田）。

傍点部の「は」を「が」に代えると理解容易になると思うのだが。

(11) 『硯滴・余録』一頁

(12) 丸山の時事短評を読み解くことで、丸山の思想のみならず、そこに投影された時代思潮や世相を推察するという面白味も生じてこよう。

(13) 『黒頭巾を脱ぐ』三頁。以下、旧漢字を新漢字に改めた。また、原文は総ルビだが引用に当ってはルビを省略した。

二 『余録二十五年』——その読解と批評

『余録二十五年』の目次は大略次の通りである。

まえがき

一 第一次大戦ヨーロッパ通信

二 第一次大戦末期の日本

三 非常時の警鐘

四 日華事変下の日本

五 軍政下の日本

- 六 太平洋戦争
- 七 終戦時代
- 八 占領された日本
- 九 平和条約の成立後
- 十 各紙の短評
- 丸山侃堂のこと……阿部真之助

昭和六年から昭和二十八年までの「硯滴」「余録」がほぼ掲載時期の順序に従って排列されている。

ただ、「二」は「硯滴」「余録」以前のものである。つまり『大阪朝日新聞』時代に欧州大戦（第一次世界大戦）下のロンドンに派遣された折りの通信で、「暗い倫敦、明るい伯林<sup>ベルリン</sup>」と題される記事なのである。なお、「二」に編入された記事は昭和六年以降のものであるから、その標題中の「第一次大戦末期」の語は不適切である。

以下、昭和六年から昭和二十八年まで四期に区切って、それぞれの時期の丸山所説を紹介し検討する。

(一) 昭和六年から支那事変勃発まで

同書の「二」、「三」に該当する。また「三」に編入の記事は全て『黒頭巾を脱ぐ』所収の記事の再録である。

まず、幾つかの改変箇所について点検しておこう。純・技術上のものと内容に係わるものとに区分できるが、後者につきコメントを加えたい。

「非常時とインテリ心理」と題する記事は、『黒頭巾を脱ぐ』に収録されたものと比べて、段落の替え方や字句、

テニヲハに修正があり、若干の文言が付加されている。概ね純・技術上のものだが、二点ほど見逃し難い個所もある。

第一に、『黒頭巾を脱ぐ』では、(ワシントン・ロンドン条約下での米英日の艦艇保持比率である)「五五三の比率でさへ米国は日本と互角の勝負ができるか自ら疑つたのに、此の上日本に強くなられては堪つたものでないのである。ここに於て米国恐るるに足らぬといふ認識に、インテリは遅れ馳せに到着したのである」<sup>(2)</sup>とあるところ、『余録二十五年』では、その最後の一文——「ここに於て米国恐るるに足らぬといふ認識に、インテリは遅れ馳せに到着したのである」が削除されているのである。<sup>(3)</sup>元の文章だと、「インテリ」が「遅れ馳せに到着した」ところの「米国恐るるに足らぬといふ認識」は、客観的な事実に基づく認識であり、著者(丸山)自身の認識でもある、と解釈できる。仮にもこの一文からは、丸山の立場から見てインテリが誤つて、そう認識するに至つた、とは読み取れない。問題の一文が削除されることによって、丸山が米国の実力を低く評価していたことが隠蔽もしくは曖昧にされるわけである。

## 第二に、『黒頭巾を脱ぐ』で、

軍部はインテリの懐柔、インテリの操縦、インテリの説得に対して、新らしい手段によらねばならぬ。インテリを厄介者扱ひにし、邪魔物扱ひにしても、インテリは亡びない。自由は亡びない。それは真に国家を思ふものの為すべき所ではないのである。殊に言論に対する社会的圧迫の如きは、拳国一致のために最も宜しくないものである。日本国民は自然に、無理をしなくても、非常時には一致し得るのである。国難には結束し得るのである。インテリは常に平和の味方で、戦争忌避だなんてことはない。独逸のインテリは心からファツシヨの提

灯を持つてはいないか。インテリは中間党であり、筒井順慶党でさへある。インテリは常に過激化し、急進化するのではなく、随分反動化し、大勢順慶的<sup>(マヤ)</sup>に動く。だから鬼面的にこれを嚇すよりもうち寛いで、理論を戦はすべきである。日本はまだその余裕はあつてよい。英仏米だつてその余裕があるのではない<sup>(4)</sup>。

とあるところ、『余録二十五年』では「殊に言論に対する社会的圧迫の如きは」から「独逸のインテリは心からフアツシヨの提灯を持つてはいないか」までの文章が全部削除されている<sup>(5)</sup>。この大幅な削除の真意は定かでない。問題の文章を削除したとて論旨の通りが良いことは確かだが、それは削除すべき積極的な理由とはならない。テキスト読解から離れて、コンテキスト、すなわち当該記事が再録された折りの時代背景に照らしてみても、昭和二十九年の時点で「いざとなれば日本国民は団結する、インテリも戦争支持に転ずる」といった趣旨の文章が、何故に削除すべきほど問題視されるのか判然としない。ともあれ、内容に係わる改変であるから、——たとえそれがさほど深慮の産物ではないにせよ——再録に際してその旨一言あるべきであらう<sup>(6)</sup>。

さて、この時期の「硯滴」「余録」に見る丸山所説の一大特色や如何。思うに、言論の自由の要請と、そのための巧みな戦略が看取されること、これである。

その典型例は、(前出の)「非常時とインテリ心理」であろう。自由主義的インテリの論調の代弁であり、それに仮託した丸山自身の信条の表明とも解される。その内容は以下の通りである。——「非常時」として徒らに危機感を煽るのは、緊張感の持続にとって逆効果となる。しかも「一部のインテリは非常時に反感を懷く<sup>(7)</sup>」。その事情はさしあたり次の通りである。

非常時とは本当のことをいっても、とかく人の耳に入らぬ時である。人と共に昂奮し、人と共に狼狽しなくては、その身に危険が迫る時である。非常時らしい顔付をし、非常時らしい言葉を使わねばへんに思われる時である。言論のとかく抑圧せらるる時である。官憲が之を抑圧するに止らず、社会的空氣が之を抑圧するのである。「お座なり」をいうのは、非常時に多いのである。これが兎角インテリをして非常時を面白く感ぜしめない。時代に追隨して、世俗に輕薄なおべっかをいうのは彼等の虫が好かない。だから、とかく非常時に反抗する。<sup>(8)</sup>

つまるところ

インテリ心理は、一番強制を嫌う。だから非常時に於てインテリ的人心を收攬<sup>しやうらん</sup>しようとするには、言論の統制よりも、言論の自由を認めなくてはならぬ。火事場に於て物いいが荒くなる如く、言論はとかく自然に一つ方向に定まるものである。その時に糞落つきに落つた言語態度を示すものは、余程の「変人」と思われるが、斯ういった変人はそう沢山あるものでない。非常時に取り乱さぬのが変人である。平常時に昂奮するのは狂人である。狂人は取締らねばならないが、非常時の変人は火事が消えれば平常人である。これは取締らなくてもよい。<sup>(9)</sup>

もつとも、インテリに往々にして見られる、こうした非常時ムードへの反発は、必ずしも専らインテリの「変人」や「天邪鬼」であることに由来するわけではない。実際のところ「現在のインテリが非常時に対して高を括るのは、日本の実力を認識し、日本を圧倒する世界の無力を認識している」<sup>(10)</sup>からである。むしろ今や、非常時への即応としての「軍備充実」・「国防の充実」よりも、「耐久的競争」に勝つべき「国力の充実」こそ肝要であるというのが、

インテリの——かつは丸山自身の真意である。その際、その方法として「独伊の如き独裁政治が果して国家を富強ならしむる道であろうか」<sup>(11)</sup>。否である。「独伊の如きは、敗戦国のせつば詰った揚句の独裁政治である。伊国の如きも決して国家的に恵まれていない。日本は独伊などの後塵を拝すべきでない。日本は英米仏を競争相手とすべきである」<sup>(12)</sup>。そして、この好敵手たる——一面、模範ともされるべき——英米仏は「議會主義」や「政党主義」をあくまで堅持している。「英米仏に於て何処に反対党の圧迫ありや、何処に言論自由の剥奪ありや、その挙国一致の形態は、自由に一致したものであり、自然に統一したものであって、そこに圧制なんか毒薬用にしたくとも一匙もないのである」<sup>(13)</sup>。

まさに、「自由主義者」(インテリ)は「英米仏に於て享受する程度の自由を以て国力発展、国家富強の道とする信念」<sup>(14)</sup>を抱懷しているのであるから、軍部とても、これを尊重する方が「インテリの懷柔、インテリの操縦、インテリの説得」<sup>(15)</sup>にとつて得策となる。非常時に却てインテリに英米仏なみに言論の自由を認めよ、すると結局はインテリは総力戦体制に協力するはずである<sup>(16)</sup>。インテリを「鬼面的に」「嚇す」よりも、「うち寛いで、理論を戦わすべきである。日本はまだその余裕はあつてよい。英米仏だつてその余裕があるのではないか」<sup>(17)</sup>と。

「言葉尻の危険」と題する一篇も注目に値しよう。

近代社会科学に対して何等の理解のない人々をして、盲蛇的に言葉尻をつかまへさせるならば、恐らく現代の政治法律経済に関する批判の大部分は、赤化思想の範疇にぶち込まれるだろう。また、実際、そういうことを公言し、大学の赤化を叫び大学生の危険思想かぶれを、触れ回るものが、相当のインテリ階級にも少なくないではないか。

固より言葉の尻は言葉の頭の問題である。どんな片言隻語にも、そのイデオロギーは掩わんとして掩われな  
い。しかも、頭を判断するにはそれだけの頭がなければならぬ。同じ言葉の尻は必ずしも同じ言葉の頭である  
とはいへぬ。如何なる新聞雑誌を見ても、そこに左翼的な言葉、表現、ものの見方を全然含まないものを発見  
するは極めて困難である。<sup>(18)</sup>

たとえば高橋是清蔵相は帝国議会の予算委員会で、米の高騰で地価が上がり地主に大いに利益をもたらしたのに  
小作人には還元されていないと述べたが、「若しこの速記録の一節を、蔵相の演説と知らぬものに読ませたならば、  
余程の急進主義者と誤解するだろう。或は赤化思想家とも思ふかも知れぬ。これが言葉尻を捉えることの危険性  
を裏書する」<sup>(19)</sup>。

高橋蔵相への好意的評価とは対照的に、まさに同様の趣旨から批判的となるのは、(京大事件を巡り滝川幸辰  
を赤化教授として処分する旨、表明した) 鳩山一郎文相の言動である。「文相は社会の欠陥、文明の欠陥について  
「余りに痛切に目撃」することを以て矯激思想の生ずる原因と認める」<sup>(20)</sup>が、しからば「大学教授たるものは社会の  
欠陥、文明の欠陥について、余りに痛切に目撃すべからず、余りに痛切に批判すべからず、余りに痛切に研究すべ  
からず、というのであるか。社会の欠陥、文明の欠陥に対する目撃不足、感覚不足が大学教授の資格であるという  
のであるか」。(鳩山のように)「あらゆる自由主義的なものの見方、考え方を以て赤化呼ばわりも出来ないことは  
ないのだ」<sup>(22)</sup>が、それこそ鳩山当人の「所謂「時勢の推移」を無視する保守的態度であり、学問の進歩性、社会の弾  
力性を失わしめ、これを動脈硬化に陥れるのは危険があるといわねばならぬ」<sup>(23)</sup>と。

また、滝川その他の東大・京大の二三の教授を攻撃した、さる代議士は「小作争議に関する極めて常識的な批判

をも仰々しく「農民を煽動」するといふ<sup>(25)</sup>」が、その手の人々は「ロンドン経済会議の専門家準備委員会の報告に、この会議が失敗すれば、資本主義の存続は困難となり、やがて崩壊を免れぬ、とあるを以て共產主義の宣伝だともいのであるまいか。そういう人々の理想は、大学の国定教科書による講義であらう<sup>(26)</sup>」と。  
このように丸山の所説には、言論自由の要請とそのため巧みな戦略が明瞭に見て取れる。すなわち、権力当局の論理を逆手に取った形での、つまりは当局からの非難をかわし摘発を免れやすい形での慎重細心なる言論自由擁護論が、縦横に展開されているのである。

註

(1) 「田中光顕という人」、「町田民政党総裁」、「文科系統の大学」、「一等車の廃止」、「甘い恋スバイ恋」、「人生は六十から」といった記事には、論旨に影響しない程度の修正がある。

(2) 『黒頭巾を脱ぐ』三一一頁

(3) 『余録二十五』三九頁

(4) 『黒頭巾を脱ぐ』三二七—三二八頁

(5) 『余録二十五』四二頁

(6) その他、同じ記事の『黒頭巾を脱ぐ』三二—三二四頁と、これに対応すべき『余録二十五』四〇頁の記述とは、かなりの改変と相当な加除が見られるが、全体の主旨には影響しないと思われる。

また、「東郷と乃木」と題する記事には次の改変部がある。——「二人とも政治家ではなかった。また政治に拘泥しなかった」  
〔『黒頭巾を脱ぐ』四五頁〕、「二人とも政治家ではなかったし、また軍人の本分として、政治に拘泥しなかったのである」〔『余録二十五』四四頁〕。これなどは判りやすい一例であろう。



(7) 『余録二十五年』二六頁

(8) 同所

(9) 前掲書三六一三七頁

(10) 前掲書三八頁

(11) 前掲書四一頁

(12) 同所

(13) 同所

(14) 前掲書四二頁

(15) 同所

(16) 既に述べたように、『黒頭巾を脱ぐ』から『余録二十五年』への転載に際して削除された一節があるが、その中に次のような明快な一文があった。「殊に言論に対する社会的圧迫の如きは、挙国一致のために最も宜しくないのである」と。

(17) 『余録二十五年』四二頁。

また、同時期（昭和七年頃）の「自由主義は不自由」と題する論考には次の一節がある。「自由主義の言論に対する社会的迫害があると感ずることは、インテリをして却つて反発的ならしめる。あるひはその迫害に対して自由主義を好むと好まざるとに拘らず、同情を抱かせる。——つまり自由主義に対する社会の神経過敏こそ、火を消さんとして油を注ぐのだ。いよ／＼自由主義者をして被迫害感、殉教者的センチに自己陶醉させることを、右翼は知らぬのではないか」（『黒頭巾を脱ぐ』二三三頁）。「泳ぐことは魚の一天性だ。飛ぶことは鳥の一天性だ。国民思想は必ずしも一切をたゞ一色にし、ただ一音にすることによつて、その健全性を保てぬ。自由主義をして自由に飛ばしめよ、踊らしめよ。それを恐れるのは、日本国民の運命を信じないんだ」（前掲書二二四頁）。

(18) 『余録二十五年』五八一五九頁

(19) 前掲書五九一六〇頁

(20) 前掲書六〇一六一頁

(21) 前掲書六一頁

(22) 同所。「人見絹枝嬢の死」と題するコラム中の次の一節も同趣旨である。「共産党事件の宮城裁判長、丹念に古本屋を探せば、日本には輸入禁止の共産党宣言でも何でも、幾らもあるし、日本訳にも殆どないものはないという。「外来思想」なんていつまでもいつているのは政治家ばかりだ」(前掲書二三頁)。

(23) 前掲書六一頁

(24) 宮沢裕(宮沢喜一氏の父)

(25) 同所

(26) 同所。更に、丸山は怒り心頭に発したかのように、こう弾劾する。「鳩山文相は、この代議士に対して「官立の大学を出た人間が就職出来ないために非常な弊害を及ぼすということが将来永く続くというような社会情勢であるならば、どうかして茲に一大英断を下さねばならぬ」と答えた。若しこんな考えを以て、京大事件に臨むならば、亦何をかいわんやである」(同所)と。因みに鳩山のこの答弁は、「財政国難の今日、官立大学を整理したら、一石二鳥、思想の悪化を防止し、国民の負担を軽減する」といふ議論」(「黒頭巾を脱ぐ」一三五頁)——「如何にも尤もらしく響く」(同所)議論——に他ならない。その他、「京大事件」と題する一篇(「黒頭巾を脱ぐ」一一四—一二六頁)も参照。

## (二) 支那事変勃発から対米英宣戦まで

同書の「四 日華事変下の日本」<sup>(1)</sup>と「五 軍政下の日本」に該当する。「五」に編入の記事は全て『硯滴・余録』所収の記事の再録である。

本節でも、まず幾つかの改変個所の点検から始めることとする。『硯滴・余録』での「支那」表記が『余録二十五年』での「シナ」表記に変わっている点、前者に所収の記事のタイトル「東西の議会人」が後者では「尾崎弔堂とロイド・ジョージ」に変更されている点<sup>(3)</sup>、これらについては別に問題はない。「事変下の文学者」という記事中の「聖戦」という語が「戦争」に変更されている事情は、特に解説するにも及ぶまい。支那事変のリアル・タイムにおいては、丸山は「聖戦」という語を用いていたという事実を記憶すれば足りることである。ただ、『硯滴・余録』「日支の民族性」で

二千六百年の日本歴史は日本人の政治に対する堅実性を示し、輕佻浮薄な国民性でないことを語つてゐるのである。国体の特殊性を表現してゐるのである。

これに反して、支那人は政治に対して極めて短氣だ。厭きつばい<sup>(5)</sup>

とあるところ、『余録二十五年』では「……語つてゐるのであるか」「……表現してゐるのであるか」と「か」(傍点は野田)を付加しているのは如何であろうか。「か」という僅か一文字の追加であるが、この操作によつてニュアンスが変わってしまうことは勿論、文意が曖昧化する、否そもそも意味不通の文面と化すばかりではないのか。いかにも姑息との印象は拭えないのである。

『余録二十五年』のこの時期の主張内容上の特色として四点ほど挙げられる。

第一に、戦時体制への協力と支持の表明である。「従軍記者の想い出」という一篇によると、日露戦争時の従軍記者の「我儘自由」とは対照的に、「現代の新聞はそうは行かぬ。戦争目的を達するための嚴重な統制から、イン

クの一滴も漏らされない。国民精神をこの一点に集中し、最高度の緊張を永続的ならしめるために、毎日々々そのたるみなき努力を続けなければならない。だから特派員や従軍記者も、いわば昔のような呑気な役目でなくなったのである<sup>(7)</sup>との由である。その名も「戦時体制」(昭和十二年九月九日付)と称する記事では、戦時体制下の(第一次)近衛内閣への全面的な支持が明言されている。「統制立法の運用」に慎重さを求めているが、それは協力・支持を前提にした上での要請であり、全体の主旨は「刀はすでに鞘を脱したのである。近衛首相のいった如く「シナをして戦意を失わしめる時」まで国民はあらゆる犠牲を忍ばねばならない<sup>(8)</sup>」との一節に表わされている。「二十五億の戦費なんか、度胸を据えた上はもの数でないのだ<sup>(9)</sup>」と。

第二に、支那への敵愾心の表出である。「通州事件」(昭和十二年八月四日付)なるコラムは峻烈である。通州で多数の日本人居留民が支那軍隊に殺戮された事件が起つたが、通州管轄の冀察政權に与えた「この信用は、豚に与えた真珠だったことは、争うべくもない。過を見て仁を知るとはシナ人の言葉だが、日本人がいかにかに「愚直」であり、誠実であり、ややもすれば姦惡の徒にベテンに掛けられるかを、端的に語ったのが、通州事件である<sup>(10)</sup>」。「シナ軍隊は、古来傭兵制度の軍隊における最悪質の標本だ。シナの排泄する最も臭気紛々たる代物なのだ。シナ軍人の倫理学は人の睡眠中に襲撃する南京虫の倫理学である。人を襲いさえすれば勝ったと思うのである<sup>(11)</sup>」との言辭は、その極め付けであろう。「上海とは何ぞ」(昭和十二年八月十四日付)と題する一篇で、丸山は上海事変(昭和七年)の経緯を振り返りつつ、眼前に展開中の第二次上海事変に関し憤懣やる方ないばかり、こう断言する。「事ここに至って、程度を超える「隱忍自重」はますます事態を悪化させるだけだ<sup>(12)</sup>」、居留民の保護について「万全の措置にぐずつく時であるまい<sup>(12)</sup>」と。

第三に、支那への敵愾心——正確には蒋介石・国民政府や支那軍への敵意と表裏一体を成す、支那の善導という

意識の表出、ないし支那事変の正当視である。

曰く、中支方面軍司令官・松井石根大将の「中国人士に告ぐ」と題する「溢るるばかりの仁愛の精神が籠っている」談話にあるように、孫文は「中国の復興と共に東亜の平和を念願努力した」<sup>(13)</sup>のであり、しかも孫文の意気に共鳴同情し彼を支援したのは他ならぬ日本志士であった。こうした前史からも明らかなように、固より日支は不倶戴天の敵では全然ない。「シナ官民」が正気に還りさえすれば、日中の提携による東洋の平和は招来される<sup>(14)</sup>のだ、と「孫逸仙と日本」昭和十二年十月十日付）。日本軍の南京攻略に際しては、その郊外にある「中山陵」も戦闘地域内に入るが、「日本軍は孫文の墓を大切に守護し、ドサクサ紛れの乱暴狼藉を防いでやる。日本国民は孫文を他人とは思わないのである」<sup>(15)</sup>。それを支那軍が「殊に中山陵に特別の警戒兵を置き飽くまで死守するに至っては、何を血迷うのか」、「孫文が正直な人間だったら、今こそその霊を現わしてシナを救わねばならぬ」<sup>(16)</sup>と「孫文の墓」昭和十二年十一月二十三日付）。

また、（前出の）「日シの民族性」（昭和十三年一月三日付）では次のように述べられている。伝統的に政治的統一が難しかったシナにも、昨今は「何といっても統一の機運は強い。ただその統一方向が間違っていた。日本の力を借り、日本と提携することなくして、反対の方向に赴いた。それがシナを今日の悲嘆に陥らしめ、あせればあせるほど赤化的亡国の道に猪突せしめたのである。（原文改行）シナ人は、政治に対して悲観的である。シナを救うには、政治に対する信頼心を育てなければならぬ。シナ人をして性急に政治を否定せしめないように導くことは日本に課せられた重大任務である」<sup>(17)</sup>と。「事変下の文学者」（昭和十三年十一月十四日付）と題する記事では、パール・バック作『大地』に言及しつつ、「實際大地を読んで、シナ人に一種の愛を感じないものはないと思う。異人種はそれによって人類愛を感じるなら、日本人はそれによって同種愛を感じるのである」<sup>(18)</sup>とした上で、次のように続け

ている。「日清戦争には、日本人はシナ人を全体として敵視し、それに憎悪感、輕蔑感を抱いた」が、「然るにシナ事変では、容共抗日のシナを憎むが、同時に防共親日のシナ人を愛する。否敵でないシナの民衆を愛する。そして敵でさえ侮らない。だから一面戦闘、一面建設は何等の不自然感を伴わないのである」<sup>(19)</sup>と。パール・バックの向こうを張つての事変下の文学者の任務とは、「この日本人のシナに対する愛憎両面を良心的に描くこと」により、「戦争」<sup>(20)</sup>「初出では聖戦」の真意義を闡明することとなければならない。これは日本国民にも長期建設の心理的基礎を与えるであろう」と。

友敵の抗争する政治世界にあつて、<sup>(21)</sup>敵を分断し、友の増強を計る論法である。敵と目される勢力の内に、真の敵と潜在的・本来的な味方とを峻別する旨アピールすることで、より有効な対敵宣伝や第三者への合理化を試みるのである。「容共抗日のシナを憎むが、同時に防共親日のシナ人を愛する」との言辞に限られない。およそ政治宣伝戦における常套句とも評せようか。ちょうど中華人民共和国政府が「日中戦争における真の敵は一握りの日本軍国主義指導者であつて、日本人民はその犠牲者であり中国人民の友である」旨を繰り返すように。はたまたアメリカ合衆国政府が「我々はアルカイダ等のイスラム原理主義のテロ組織と戦つていたのであつて、イスラム民衆を敵とするものではない」旨、声明するように。

第四に、ナシヨナリスティックな自尊心が見て取れる。国際政治の舞台での主役を実感したかのような、晴れがましさの感覚である。——日独伊防共協定は、実力に裏づけられた日本の主體的選択の賜である。往年の「日英同盟の成立では、日本国民が実に「驚喜」した。それほど国民的自信が薄弱だった」<sup>(22)</sup>。「しかも今日は国民的自覚のコンクリートの上に築かれた日独伊協定である」<sup>(23)</sup>。独伊の長所は採るが「何でもかんでも随喜渴仰するのではない」。「日本は独伊に「追隨」するのでなく、同行するのである」<sup>(24)</sup>と（「日独伊防共協定」（昭和十二年十一月六日付）。

日独伊三国同盟に関しては更に誇りかである。——「日英同盟は英国が日本の東亜における発展力を阻止する意図をもって結ばれたと歴史的結論を下し得る」<sup>(25)</sup>底のものが、このたびの「新同盟は日本の大東亜における新秩序建設に関する指導的地位を独伊が認め且つ尊重したのである」<sup>(26)</sup>。一弱小国である日本が結ばざるを得なかった日英同盟とは全く性格を異にする。「日本の大東亜共栄圏に指導権をもつことは独伊に認められて初めて確立した原則ではない。それは、独伊の欧洲指導権が日本に認められて独立したのでないのと異ならぬ。が、ここに初めて完全な自主的の軍事同盟が締結されたのである」<sup>(27)</sup>と（「三国条約」昭和十五年九月二十九日付）。

さて、『硯滴・余録』に所収の記事も、支那事変勃発から対米英宣戦までの時期に書かれたが、そこにも戦時体制への協力・支持を唱えるものや、支那への敵愾心を露にするもの、支那の善導あきづという意識の下に支那事変を正当視するもの、<sup>(28)</sup>ナシヨナリズムを表出するものが、それぞれ多数見られる。

その他、特徴的なのは概して親独的なドイツ観とともに、ナチスへの高い評価やヒトラーへの賛辞が表明されている点である。

まずは「独塊合併」（昭和十三年四月十二日付）と題する記事を全文掲げよう。

ヒットラー総統に賛成の投票、オーストリアでは九九・七五パーセント、これを除いたドイツ全国では九八・八四パーセントといふ好成绩だった。

ヒットラー氏は全国を遊説し、最後にウインで演説した時は声がかれて聊か疲労の体だったが、上からの指導によつて人民の同意ある政治をやるといふ建前だけに、お高くとまつて民衆を愚にし、世間を陰鬱にして、その権力を揮つてゐるのではない。飽くまで陽気で、華麗で、賑かな雰囲気の中に、ヒットラー氏につ

いてゆくことを楽しませるのである。

オーストリアで反対及び無効投票合せて僅に一万票に過ぎなかつたのは、実に驚くべき事実でないか。読書万巻の知識階級の誇負はもつても、かゝる驚くべき事実を驚くことを知らぬものは、政治を語る資格がない。虫が好くとか好かぬとか、イデオロギーがよいとか悪いとか、勝手にいふことを妨げないが、幾多の歴史的事実はすでにヒットラー氏をありふれた独裁政治家といふことを許さないのである。この人にして初めて形式的の民主主義を嘲笑し、自由主義を罵倒し得る資格があるといへるのである。<sup>(29)</sup>

更に、独伊の二党独裁政治による官僚統制を支持するもの——「党に国民的基礎があるから、国民生活の實情から自然發生するものが法律となる。独裁政治といはれても国民と遊離した役人万能の政治と比べられないのである」<sup>(30)</sup>——や、同様の観点からする特にヒットラー及びナチスに対する称讃が頻出する。『わが闘争』に言及してヒットラーの官吏嫌いを紹介しつつ、現今の日本で展開中の「革新」運動も官庁主導の人民を見下すような類であつてはならぬと説くものや、<sup>(31)</sup>「ナチスの娯樂に対する指導は至れりつくせりで、如何に娯樂の価値を高く評価してゐるかゝわかる。スポーツなどには財政不如意の中に金に糸目をつけない。ヒットラー・ユーゲントの日本派遣の如きも、国際収支の算盤勘定からいへば、随分『贅沢』なやうだが、そこがナチスの官僚的な考へとは違ふ所である」と評価するもの等は、その一例にすぎない。また、ナチスの政策上の実績が瞠目の対象となつてゐる。「ヒットラー氏の力ある政治によつて、六百五十万のドイツ失業者が四年間に四十七万人に激減した如き事實」<sup>(32)</sup>が指摘され、これが「結婚奨励制度と相俟つて出産率を増加させたのであるし、死亡率は昔から低かつたことを忘るべきでない。ドイツ国民はナチスによつて国家的にも国民的にも希望を与へられたから人口増強政策が成功したのだ。イタリアも



また然りである」<sup>(34)</sup>と賛嘆され、その国防政策については「ナチスが九百億マークといふ巨費を投じて軍備を充実し、世界最新最強の装備を整へたことに驚くものは、僅々数年間にかういふ膨大な軍事予算を消化し、計画通り寸分の狂ひもなくこれを完遂したといふことに一層驚かねばならない」<sup>(35)</sup>と刮目の的となる。

とりわけ印象的なのは次の一節であろう。既に触れた「非常時とインテリ心理」等の自由主義的な論調や懐疑的な独伊観の表明とは、まさに好対照を成している。『自由』といふことはとかく『自由主義』と混同されるが、ナチスは最も自由の理念を高調してゐる。即ちナチスのいふ自由は、内的自由である、ナチスの兵士が強く、銃後の国民が一条乱れぬ団結力を示してゐるのは内的自由によるのである、民主主義的自由の形式的な概念とは全く違ふのだ」<sup>(36)</sup>と。

なお、戦後に編集・刊行された『余録二十五年』では、このようなナチス称讃・ヒトラー賛美の記事は全て再録されていない。

註

- (1) 「四」に編入の記事は『事変下の日本』——筆者未見——に所収の記事の再録かと推測できる。
- (2) 因みに、丸山は「支那といふ言葉」(昭和十六年六月十七日付)と題するコラムで、大略次のように述べている——「支那及び支那人といふことは語源的にも蔑視的觀念を含んでゐるわけでないことは、支那人も知つてゐるのである」。その言葉を改めるには及ばない。それは中華意識を持つ支那人が、自国の「東洋」に分類されているのを不快と思うかもしれないといつて「東洋」といふ言葉が廃止すべき理由」とならないのと同様である、と。(『硯滴・余録』二七三—二七四頁)
- (3) 『硯滴・余録』七八—一七九頁、『余録二十五年』八八—八九頁。

- (4) 『硯滴・余録』三七頁、『余録二十五年』九四頁。
- (5) 『硯滴・余録』二頁
- (6) 『余録二十五年』八六頁
- (7) 前掲書六九頁
- (8) 前掲書八〇頁
- (9) 前掲書八一頁
- (10) 前掲書七七頁
- (11) 前掲書七七―七八頁
- (12) 前掲書七九頁
- (13) 前掲書八二頁
- (14) 前掲書八三頁
- (15) 前掲書八五頁
- (16) 同所
- (17) 前掲書八七頁
- (18) 前掲書九三頁
- (19) 同所
- (20) 前掲書九三―九四頁
- (21) 言うまでもなく、カール・シュミット『政治的なものの概念』(一九三二年)を参照。
- (22) 前掲書八四頁
- (23) 同所

(24) 同所

(25) 前掲書九六頁

(26) 同所

(27) 同所

(28) 「汪主席入京」(昭和十六年六月十七日付)との記事には、次の一節がある。「日本がシツカリしてゐればこそ、欧米侵略主義及び共産主義も、まだ今までの程度で食ひ止めたのであつて、それだから欧米は支那の抗日を何より必要とし、極力これを支持して『東洋の内乱』を続けさせてゐることを、汪氏は認識してゐるのである」と(『硯滴・余録』一二七二頁)。日本は欧米列強による支那の植民地分割を阻止することで、支那保全に貢献しているとの見解は、高坂正顕・西谷啓治・高山岩男・鈴木成高『世界史的立場と日本』(中央公論社、昭和十八年)にも窺える。

(29) 『硯滴・余録』一二一一三頁

(30) 前掲書一八四―一八五頁

(31) 「フランコ將軍」(昭和十三年二月二日付)前掲書三四二―三四四頁。

(32) 前掲書三三頁

(33) 前掲書三四五頁

(34) 前掲書五四頁

(35) 前掲書三六一頁

(36) 前掲書一九三―一九四頁。その他、ヒトラーの紀元二千六百年祝賀メッセージを踏まえて、日独共通の美点を謳い上げた「プロシヤ的天才」(昭和十五年十一月十七日付)(前掲書九六―九八頁)や、映画『民族の祭典』中のヒトラーの仕草からその人間味を紹介し親近感を表明する「英語と独逸語」(昭和十六年三月二十九日付)(前掲書七六―七七頁)、ヒトラーを大指導者と称える「指導者讃美」(昭和十六年六月四日付)(前掲書六〇―六二頁)などがある。

## (三) 対米英宣戦から敗戦まで

大東亜戦争下の記事は『余録二十五年』『六』に排列されている。<sup>(1)</sup>そのうち「事既に此に至る」と題する一篇は、『硯滴・余録』所収時には「大詔渙発」との表題であった。「大詔渙発」の冒頭には、「畏くも宣戦の大詔を渙発あらせられ、すでに帝國陸海軍の行動開始となつて、沸騰しつゝ、あつた一億国民の胸を圧してゐた重石は除かれたのである」<sup>(2)</sup>との一文があつたが、「事既に此に至る」ではこれが削除され、代わりに次の一節が附加されている。曰く「以下は昭和十六年十二月以後の余録。言わば『言論不自由録』であり、言論畏縮録であり、軍国随筆である」<sup>(3)</sup>と。また、『大詔渙発』中にある「<sup>けつて</sup>々々たる小人によつて支配される英米」(ルビは野田)との表現は、「事既に此に至る」では単に「英米」と改められている。<sup>(4)</sup>

この時期の「硯滴」「余録」の内容上の特色は、概ね次の五点に纏められようか。

第一に、例えば桑原武夫のような知識人が対米英開戦時や緒戦の勝利に覚えたであろう一種「スーッとしたような」<sup>(5)</sup>爽快感の表出である。「大詔渙発」中の(削除された)先の一文然り、「壮烈な轟沈」(昭和十六年十二月十日付)と題する記事の次の一節然りである。(真珠湾攻撃につき)「かくて日米戦争は世界海戦史上空前の大勝を以て火蓋が切られたのである。『中略』外交には先手を打たせて置いて、いざともなれば卑怯な後手を打った例のないのが日本の姿であるのだ。『中略』隠忍八箇月、最後まで平和のために努力した日本の「決意」を「恫喝」と誤記した米英も今こそ思い知つたであらう」<sup>(6)</sup>と。

また、これに伴い(当然ながら)戦時中の反米意識の昂揚も見て取れる。——フィリピン・ミンダナオ島で七十余名の在留邦人が米兵に殺されたことが判明したとして、「アメリカ人の性格が、国内の異人種、異教徒に対して遠慮会釈なくさらけ出されることは、その開拓史、建国史の明らかに語る所である。つまりインディアンを迫害し、

黒人を迫害する場合、正義人道は破れ靴の如くうち捨てられる」「戦時国際法とは白人と白人と戦うときに通用するものと心得ている白人は多い。正々堂々たる抗戦の能力も自信もない彼等の焼くそ心理が露出するのは、怪しむに足りない」と断ずるように。

第二に、大東亜戦争を歴史的に必然と捉える史観が窺える点である。——「東亜の指導国たる日本が欧米的強大国と戦うのは、スエズ運河によって欧亜二大陸が分れ、パナマ運河によって太平、大西両洋の合した時からの宿命であり、歴史的論理の帰結である」と。その上で、「東亜永遠ノ平和ヲ確立」せんとするの当該戦争の目的に適う論調が見られる。たとえばフィリピンについて、フィリピンのさる大学教授の「日比同盟論」を紹介したり、「東亜共栄圏」にフィリピンは当然に所属すべきことを説く如しであり、インドについて「日本に協力して英軍を駆逐する外に、インドの独立は望まれない。このことを、インド民衆に徹底させたいものである」と論ずる如しである。

第三に、戦局悪化の認識——硫黄島玉砕について「ここまで来てしまったことについて、かれこれ愚痴を並べても仕方がない」——と、それに伴う切迫した危機感の表明である。「もはや過ぎた責任を問うべき時は過ぎた。何も文句はない、先ず自己の責任をつくさねばならない。『原文改行』言葉と行動との隙間があつてはならぬ。号令を掛ける人、掛けられる人、悉く号令を空虚な響きにしてはならない」と。

第四に、戦時下の世相批判がある。「最低国民生活の確保」に対して「最低国民道德の確保」も併行すべきである」と説き、現今の人心荒廃ぶりを指摘する。「……街頭の口汚い喧嘩沙汰や乗物の殺風景になると、同じ屋台船に乗って国難突破の覚悟を固めているものとは思われない」不潔、盗難、禁制品・贅沢品の誇示もまた然りである。しかし、真に一致団結して総力戦完遂を期するのなら、「戦争とは左程縁の近くないように思われ勝ちな日常の小道徳」は「小事に似て大事である」のだ——こう丸山は力説するのである。

第五に、「言論の自由」の巧みな擁護論が確認される点である。かかる議論はかつて「非常時とインテリ心理」や「言葉尻の危険」といった好篇にも窺えたが、その精神は自身「言論不自由録」と卑下する大東亜戦争下にも、なお息づいている。言論人として面目躍如と評せよう。

「国政紊乱罪」(昭和十八年二月二十八日付)と題する一篇<sup>(20)</sup>を読み解こう。——戦時刑事特別法を巡る帝国議会での改正論議につき、丸山は「国政紊乱罪」の概念を問題にする。「国是」に反する言論を取り締まるというが、「いうまでもなく憲法こそ国政施行の最高方針を宣布せられた「国是」の法的表現である」。すると、(三田村武夫氏が述べたように)「憲法二十九条<sup>(21)</sup>の「言論」の「自由」を有名無実ならしめるような立法はあくまで避くべきだ」。しかし、この要点が現下の空気にあつては——嘆かわしいことに——「決して解り切ったこととということができない」。「止むを得ないから行う言論制限の精神は、この法律が施行されても忘るべきでない」——丸山の真意はこの一点にある。

清瀬(一郎)氏の指摘した如く、言論統制が「官僚という二字を書いてもいけないという感じを与えている」ようになっては、憲法の本質どころか、すべて法律の本質を曲解することになる。

谷(正之)情報局総裁は言論報道機関が国策の推進、国論の昂揚、国民の結束に一層その使命を果すと共に、戦時思想宣伝戦にも最善を尽さんことを期待すると述べたが、言論報道機関を「萎縮」せしめることによって、この目的を達することはできない。

戦時下における言論の自由とは、のびのびと国民の戦意を昂揚するものでなければならぬ。言論の下手な取締りが行われ易い。これを取締る必要を当局は三思すべきである。

権力当局の論理の前提を認容しつつ、その前提そのものから先方を牽制する主張を導くという、一面屈折した、それだけに巧妙な行論が見出せるのである。丸山は三田村氏の「愛国の至情から出た言論にも非常立法の制裁を行う必要があるなら、戦争指導上の誤りに対しても当局の責任を取るべきだ」<sup>(22)</sup>との発言を紹介する。その全体の主旨はもはや明白であろう。

註

- (1) なお、支那事変および大東亜戦争下の丸山幹治のその他の論説のリストにつき、福島鑄郎・大久保久雄共編『戦時下の言論(下)』(日外アソシエーツ、一九八二年)七五一―七五二頁を参照。
- (2) 『硯滴・余録』四四六頁
- (3) 『余録』二五年一〇一頁
- (4) 『硯滴・余録』四四七頁、『余録二五年』一〇二頁。
- (5) 竹内好は、桑原武夫の次の回想を紹介している。「えらいことをおっぱじめたと思った。……率直に言って、日本が非常に悪いことを仕掛けたという自覚はなかった。三日後に英国戦艦プリンス・オブ・ウェールズが撃沈されたときは、今から考えるところがおかしいが、とにかくスリットとしたような気持だった」河上徹太郎他『近代の超克』(富山房、昭和五十四年)三〇二頁。
- (6) 『余録二五年』一〇三頁。「……米国の反政府輿論は日と共に高まるであろう」(同書一〇四頁)との端的な誤認もある。
- (7) 前掲書一〇七頁
- (8) 大川周明『米英東亜侵略史』(第一書房、昭和十七年)は、その説得力ある展開である。特にその一〇頁以降を参照。
- (9) 『余録二五年』一〇二頁
- (10) 前掲書一〇八頁

- (11) 前掲書一〇九頁
- (12) 前掲書一一四頁
- (13) 前掲書二二一頁
- (14) 同所
- (15) 前掲書一一八頁
- (16) 前掲書一一九頁
- (17) なお、戦局思わしからぬ長期戦下の世相批判としては、清沢冽『暗黒日記』（山本義彦編、岩波書店、昭和三十五年）を参照。
- (18) 前掲書一一八頁
- (19) 前掲書一一九頁
- (20) 前掲書一一四―一二六頁
- (21) 「日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印行集会及結社ノ自由ヲ有ス」
- (22) 前掲書一一六頁

#### (四) 敗戦から昭和二十八年まで

敗戦から昭和二十八年までの記事は、『余録二十五年』の「七 終戦時代」、「八 占領された日本」、「九 平和条約の成立後」に収められている。

尤も、この分類には不備がある。「七」と「八」との境界が不明で区分の必然性の乏しいこと、他、「九」に平和条約成立（昭和二十六年九月八日）以前の記事が十一篇も編入されている点である。特に後者について、平和条約締結以前はGHQ（連合国総司令部）によるプレス・コード（新聞報道規制）が存続していたのに対し、締結以後



は当然に撤廃されるといった、言論統制を巡る状況に明らかな変化が生じたのであるから、その事実を考慮すれば記事の分類について——よしんばその内容に関し実質上は大差ないとしても——多少の慎重さが求められるところではあろう。

記事内容の特色としては、第一に、GHQ（初期）占領政策の支持や、これへの順応・適応が挙げられる。戦争責任・戦争犯罪追求への呼応、平和憲法への賛意表明などがこれである。「幣原内閣の解剖」（昭和二十年十月九日付）という記事に曰く、「……戦争責任者を排除する組閣の基本方針は、単にマツカーサー司令部の要請によるのみでなく、新日本は「憲政の維持」であるという自覚に基づくものでなければならず、それを政策の上に具体化しなければならぬ<sup>(2)</sup>」と。また、「重臣層の戦争犯罪」（昭和二十年十月十九日付）とのコラムでは、GHQによる思想警察等の廃止と関係官僚の活動禁止指令、これに伴う高官の辞表提出を歓迎しつつ、次のように畳み掛ける。「……戦争犯罪者の巨魁と認められている重臣層から一人でもその責任を明らかにしたものが無いのは奇怪の骨頂である。近衛公が総理大臣の礼遇を辞した如きは固よりというに値しない<sup>(3)</sup>」と。「旧悪露見か」と題する一篇は、東京裁判に関するもの。「戦犯によつて起訴された二十八名、われ人共にかつて大勲位金鵄勲章功一級、若しくは昇爵、授爵を夢みた連中である。獄裏の夢やいかに<sup>(4)</sup>」と、冒頭から嘲弄的である。以下、起訴状の主旨を肯定している。審理対象の始期が昭和三年一月一日までも遡るのは「飛んだ旧悪露見ともなる。が、近代の政治史、軍閥史を知るものはこれを当然としなければならぬ<sup>(5)</sup>」由。その時点から昭和二十年九月二日に至る十七年間の「日本の侵略主義的計画実行<sup>(6)</sup>」、すなわち「平和愛好諸国民の利益」と共に「日本国民自身の利益」の大なる毀損の原因をなした国民的犯罪<sup>(7)</sup>」が「裁判の進行によつて明るみに出る」と。GHQのプレス・コードも作用してか、これらの解説には問題があろう。一点のみ挙げれば、昭和三年一月一日から十七年の長きにわたって、幾つもの政権交代が生じた

この長期間において、侵略主義の「共通の計画又は共同謀議の立案又は実行」が一貫して存在したといえるのかという疑問である。ともあれ、現に日本側弁護団の清瀬一郎や高柳賢三が、こうした点を含め東京裁判の法理を徹底的に論難していることと比べれば、丸山の所説には言論人たるの批判精神が欠如していると評さざるを得まい。

「新憲法の客観的条件」（昭和二十一年十一月四日付）では、平和憲法としての日本国憲法への賛意が表明されている。日本国憲法がGHQ初期占領政策の最大の産物とすれば、丸山の同政策への同調は明瞭となる。「マ元帥は「新憲法は世界平和への一歩前進」だと祝福してくれたが、われらも確かにそうであり、又そうでなくてはならぬと思う」と。更に、駄目を押すとばかり、あたかも当局者さながらにこうも断じている。「三日の憲法公布式典が全国的に平静に行われたのは良かった。しかし何か熱意が足りぬように見たのは僻みであろうか。この式典にあたって国民は外面的な喜びから内面的な反省と沈思に傾くのが当然である。しかし、もし一般に無関心などという徴候があつたら厳しく指弾されねばならない」と。

さて周知のように、GHQの初期占領政策と後期占領政策とではその内容が一変した。前者は「右」に閉ざし「左」に開く方針——左翼系政治犯の釈放と国粹主義者等の公職追放——であるのに対し、後者は「左」に閉ざし「右」に開く方針——レッド・パージと追放解除——というように。興味深いのは、そうした相互に対照的な政策に関し、そのそれぞれに適合する言明が見られる点である。昭和二十一年五月五日付の「鳩山一郎氏の追放」と題するコラムでは、鳩山一郎の公職追放に關しても「氏の政治的過去を洗えば、幾らでもぼろが出る。今さら民主主義の衣で、それを包み隠せない」とした上で、こう述べている。「民主主義の名に隠れて共產主義の爪牙を磨く虎視眈々たる事實」を大声疾呼したのは、今尚治安維持法的精神の持主たるを自己暴露したことになった。不覚の至りである」と。鳩山の反共声明を「不覚の至り」と見るわけである。ところが、その四年後の昭和二十五年六月七日付の「日

共巨頭の追放」という一篇では、徳田球一・野坂参三・志賀義雄他の共産党員の公職追放指令を支持しつつ、こう論じている。「マ元帥は共産党が憲法上の權威にちよう戦<sup>(マ)</sup>していることを今日発見したように解してはならない。元帥は、日本国民が自身の目で共産党の実態を見るまで、いわば執行猶予をやっていたままだと思われる<sup>(12)</sup>」と。そうであるなら、四年前の鳩山の反共声明は「不覚の至り」などではなく、共産党の本質暴露ということになるはずだが。ともあれ、このような「あちら立てればこちらが立たぬ」式の言説、それもその論旨が初期占領政策にも後期占領政策にもともども即応した言説に接すると、どうしてもそこには時流迎合・時局便乗の氣配を看取せざるを得ないであろう<sup>(13)</sup>。

この時期の記事内容の特色として第二に指摘できるのは、戦前戦中期の自己の言説との齟齬・不整合・矛盾・自家撞着である。

ナチス・ヒトラー觀の急変は、その一例に過ぎない。丸山は、コラム「新聞週間」(昭和二十三年九月三十日付)では「だから満州事変後にもナチスカぶれの軍人と官僚とがなければ、日本の良心と良識とは、日本を救ったかも知れない<sup>(14)</sup>」と述べ、「日本人十二才の根拠」(昭和二十七年九月十六日付)との一篇では吉田茂の一發言を揶揄する際に「精神年齢十才程度でなくちゃいえない<sup>(15)</sup>ヒトラー張りの名調子」と表現するが、何れも自身のナチス・ヒトラー称讃を忘却し尽したかのような口吻ではある。かつては近衛内閣への支持・協力が表明されたものの、当の近衛文磨は今や「戦争犯罪者の巨魁<sup>(17)</sup>」となる。

より問題なのは、前出のコラム「旧悪露見か」であろう。東京裁判で大川周明が起訴されたのは「日本の民族的優越性を主張する有害なる思想を」<sup>(18)</sup>宣伝するなどした咎により当然だと論ずる件があるが、(本稿二)で見た通り<sup>(19)</sup>自身も「日本の民族的優越性を主張する」思想を宣伝していたはず。しかも、かく「日本の民族的優越性」を

論ずる際、それが「有害」であるとの意識は寸毫もなかったはず。今やそれを東京裁判の検察官とともに「有害」と断ずるに至った理由と経緯は不明のままである。

また、同コラムで示された——東京裁判起訴状と同じくする——認識、すなわち（東京裁判の審理期間である）昭和三年一月一日から昭和二十年九月二日までの期間、日本の「対内政策と対外政策」とは「平和愛好諸国民の利益」と共に「日本国民自身の利益」の大なる毀損の原因をなした国民的犯罪<sup>(20)</sup>であるとの認識は、決して同期間中の丸山自身の見解でないこと、リアル・タイムにあつて丸山がそう考えていたのではないことは、（本稿二一（二）、（三）で見た）戦時体制協力論や反米英観を想起すれば、もはや明瞭であると思われる。一例のみ付け加えよう。——丸山は昭和十三年十月九日付の「無名の英雄」というコラムの中で、支那事変論功行賞での金鶏勲章受勲者に触れ「名誉のうちにも名誉ある護国英霊<sup>(21)</sup>」と称讃し、その「殊勲甲」該当者は「いづれも日本歴史に特筆されてゐる古人に優るとも劣らぬ赫々たる武勲を奏した人々である。これらの人々と同時代に生きたことを銃後の国民は限りなく幸福に思ふ<sup>(22)</sup>」と記している。然り。丸山にとり彼らは「国民的犯罪」の実行者や犠牲者などではありえず、まさに「無名の英雄」だったのである。

更に論及されるべきは、言論人のモラル、新聞人の職業倫理に関してである。前出コラム「新聞週間」で丸山は次のように説く。

インボデン新聞課長の述べた如く「戦時の残忍な圧迫を受けた」暗黒期を脱出して全日本の新聞は再生したばかりでなく、新憲法には極めて有望な前途を保障されている。

この「戦時」という意味は、世界の戦争観が変化した満州事変以後を意味すると思われる。日本の新聞はか

つて国民の声を戦時にも代表したことがないではなかった。これが最もゆがめられたのは満州事変以後であることは争えない。<sup>(23)</sup>

他人事のような客観的叙述ではある。ともあれ、この分析によれば、丸山自身の記事も「戦時の残忍な圧迫を受け」つつ他律的に書かされたというのであろうか。また、この伝で行くと、満州事変以降の記事、すなわち『余録二十五年』に収録された大半の記事は、国民の声を代表せぬ「ゆがめられた」言説という次第となる。まさにこの時期に丸山は「硯滴」「余録」欄でそれこそ心血を注ぎ筆を揮ったと思われるが、そうした夫子自身の努力は一体何であつたと解されるのであろうか。

丸山幹治の戦前戦中期の言説は概して高く評価されよう。個々の事実認識・状況判断の誤りは——後世の目から見て——明白であるものの、国難来るといった危機感を発条とした国家総動員と官民一致結束の志向は半ば当然であり、かつ、(それを前提とした上での)時局批判は勇敢で気骨あると認められる。それと比べると、戦後の言論の質は落ちるようである。『余録二十五年』中の終わり九年の言説には、少数の例外を除いて見るべきものは無い。未曾有の敗戦とそれに伴う外国による占領という客観的情勢の激変に際して、言論人の節操を貫きつつ<sup>(24)</sup>許容された言説<sup>(25)</sup>を展開することは、やはり所詮は至難ないし不可能ということであらうか。

ただ、既に触れたように、丸山の言説は総じて党派的でないことが救いである。また、自身の著作について、後の時点から言挙げして様々に込み入った自己解説を加えるということもない。<sup>(26)</sup>存外に天真爛漫にしてオツチヨコチヨイな要素、その意味で「傍若無人的な自由性の発露」<sup>(27)</sup>が窺えるかも知れない。それが丸山幹治『余録二十五年』の持ち味とも言えようか。

註

- (1) G H Q が同年十月四日に示した「政治的・民事的・宗教的自由に対する制限撤廃の覚書」の内容を指すと推測される。
- (2) 『余録二十五』一二五頁
- (3) 前掲書二二七頁
- (4) 前掲書二二一頁
- (5) 同所
- (6) 同所
- (7) 前掲書二二二頁
- (8) 前掲書二二七頁
- (9) 同所
- (10) 前掲書一三三―一三四頁
- (11) 前掲書一三四頁
- (12) 前掲書一六二頁
- (13) 米国の対日占領政策にそのつと同調的であった丸山は、占領軍総司令官・マッカーサーを絶賛するが、その言葉に追従の響きがないとは言えない。「日本を去るマ元帥」(昭和二十六年四月十二日付)前掲書一七二―一七三頁を参照。
- (14) 前掲書一五〇頁
- (15) 前掲書一九四頁
- (16) 本稿二―(二)を参照。
- (17) 前掲書二二七頁
- (18) 前掲書一三二頁

(19) 「支那は民主国か」(昭和十三年二月二十八日付)と題するコラムでは次のように述べられる。——「皇軍の南京入城後、ドサクサ紛れに掠奪暴行など悪事の仕放題だったギャング」が摘発されたが、それは「支那人の一味だった」。「皇軍の勝利をもってアッチラの如く考へる米国人がある」そうだが、「さういふ誤解は日本の強さには国民の道義的基礎あり、支那の弱さには、その精神的欠陥があることを認識しないからだ」。西洋では「掠奪でも何でもあらゆる罪悪は戦争につきものだ、と心得て」「戦争の道義性を一切合財否定する」。結局「欧米人が自分達の軍隊にどんな悪評を浴びせようと勝手だが、皇軍をもその例外例でないとする先入観念から、色々な悪宣伝を信じたがるのである」と。『硯滴・余録』二七九―二八〇頁を参照。

(20) 『余録二十五年』一三二頁

(21) 『硯滴・余録』三四頁

(22) 同所

(23) 『余録二十五年』一四九―一五〇頁

(24) 官僚的発想や官僚制の論理——と目されるもの——への義憤もしくは揶揄がこれである。これは戦前戦中戦後と終始一貫する論調であろう。「大岡越前の人気」(昭和二十五年九月二十五日付)、「一家心中と一国心中」(昭和二十六年一月二十六日付)、「野に帰った山川菊栄」(昭和二十六年七月二十五日付)、「文化勲章と年金」(昭和二十六年九月二十九日付)——それぞれ前掲書一六八―一六九頁、一七〇―一七一頁、一八二―一八三頁、一八六―一八七頁を参照。その他、「消息不明の抑留日本人」(昭和二十五年二月三日付)は、ソ連による捕虜シベリア抑留を批判する、筋が一本通った正論である。前掲書一五六―一五七頁を参照。

(25) あるいは、丸山が「言論不自由録」と後に特記した大東亜戦争下の言論よりも、占領下の言論の方が、より不自由であったとも説明できようか。

(26) 次男・眞男との際立った相違である。拙稿「戦前戦中の丸山眞男の論説と戦後におけるその自己解説について」(『愛媛法学会雑誌』第二十六巻第一号、(平成十一年八月)三三―四九頁を参照。

(27) 『黒頭巾を脱ぐ』三頁

付記 本稿執筆に際しては帝塚山大学の関静雄教授から多大の助力を得た。同氏の助力がなければ、一行・一字たりとも作文できな

かったことに疑いはない。ここに深甚なる謝意を申し上げる次第である。